

子ども文化の詩学 (2)

描かれた世界への入口

— 絵本という〈場〉 —

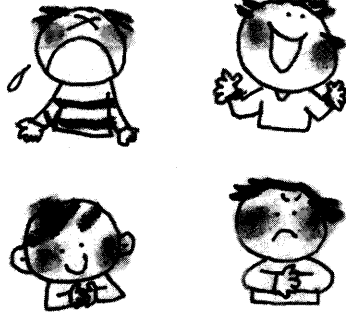
森下みさ子

◆ 「絵本」というモノ

絵本が子ども向けの文化財であることに、私たちはほとんど疑いをもたない。ブックスタートの運動が示すように、子どもの成育においても、親子の関係づくりにおいても、また読書の習慣をつ

けるうえでも、子どもの周りに適当な絵本があることは望ましいに違いない。しかし、生まれて間もない子どもにとって、実際のところ「絵本」とはどのようなモノとして現れるのだろうか。

「本を読む、というのは、よくよく観察すると、とても複雑な行動だ<sup>\*</sup>」として、細馬宏通は、紙の



束に指の腹をあてて一枚だけつまみ上げ、残りのページを押さえつつ「めくる」ことの難しさを説く。そして、このような複雑な行動ができるようになる背景には、赤ちゃんの関心と、それを助けるお母さん（保育者）との共同作業があるのだという。

細馬によれば、ある時期（八か月ころ）から赤ちゃんは何かをめぐって現れた面を見ることに関心をもち始めるらしい。ちよūdどそのころに絵本が傍らにあれば、めぐってみるには格好の素材である。しかし、先に記したとおり、紙の束をめぐめることは容易なことではない。そのとき絵本を支えて一枚ずつめくれるようにしてくれるのが、傍らにいる大人（保育者）である。保育者がしっかりと絵本を支えていくからこそ、赤ちゃんは小さい指で分厚い絵本を押すようにしながらもページをめくることができるのだ。それだけでは

ない。めくると同時に、そこに描かれたものについて、保育者は積極的に指をさしたり、語りかけたり、話をしてくれたりするのである。

こうして、絵本は、まず何よりも赤ちゃんと大人（保育者）との「共同作業」を促す。これほど赤ちゃんと大人を一定時間「いっしょに居させようとする」モノはほかにもないかもしれない。赤ちゃんのお気に入りのおもちゃなら、そのまま一人で遊ばせておいてもよいし、生活用品なら使用方を徐々に教えることになるだろう。逆に危険物には、即座に取り上げられてしまう。しかし、絵本に關していえば、赤ちゃんが関心をもつと同時に、大人はそれを開くのを手伝い、ある時間をかけて、その中の「描かれた世界」へと赤ちゃんを導くようにふるまう。

それは、大人が目の前に在る世界とは異なる「描かれた世界」の魅力を知っているからだ。今

ここにはない「描かれた世界」の中で、心がざわめいたり、ふるえたり、弾んだり、膨らんだり、はるか遠くまでさまよっていったりする、その楽しさを味わったことがあるからである。そして、その心の体験が、人生において励みや慰めや勇気や安心感を与えてくれたり、味わったり、考えたり、想ったりする豊かな生き方を育んでくれることを、自らが知っているからである。もし、大人がその悦びを知らずして、「描かれた世界」をただ学ばせようとするとするなら、それは幸せな共同作業にはなり得ない。

では、いったい絵本の中に息づいている「描かれた世界」の魅力とは何だろうか。

### ◆絵本に描かれた世界

子どもたちがすんなりと入って行って存分に楽しめる絵本は、必ずしも正しく美しく描かれたも

のではない。また、芸術的な意味合いをもった表現力に優れたものとも限らない。大人から見れば決してうまくはないつたない絵、アンバランスな構図やほみだした色、おどろばに見える描線や間違った遠近法で創られた世界が、しっかりと子どもの心をつかまえていることを、私たちは知っている。しかも、それらは常に、この世界に新しくやってくる幼い人たちを、ほぼ普遍的に引き寄せてやまない魅力となっている。子どもたちが大好きな絵本は、子どもが感じ取る世界をみごとにとらえて、魅力的な「描かれた世界」を提供し続けている。その意味で、子どもの心の羅針盤でもあるのだ。

たとえば、多くの子どもが好きになる『ぐりとぐら』の絵は、必ずしも美しいとはいいがたい。

葉っぱの上に幹が乗っているような木は、小さな子どもが描いたような表現であるし、描かれた動

物たちは不自然な動きをしている。遠近法が使われていないせいも、野ネズミたちが木よりも大きく見える場面もあれば、卵の大きさも場面によってまちまちである。オオカミもシカも、ワニもゾウも、カニやトカゲやカタツムリまで、みんな集まってくる森などあるはずもない。おまけにくら大きいとはいえ、カステラがすべての動物にたっぷりあてがわれ、まだ残っているなど、現実には考えられない。



▲『ぐりとぐら』  
中川李枝子／文  
大村百合子／絵、  
福音館書店

しかし、子どもたちは、この絵本に瞬く間に魅了される。「ぐりとぐらぐりとぐら」とリズムよく現れた野ネズミたちが見つけた巨大な卵、それがみごとな黄色いカステラに膨れ上がって画面を満たすとき、見ている子どもたちから歓声が上がります。

こんなに豊かで幸福な、ふっくらと黄色に輝く食べ物を見たことがない、それくらい満ち足りた空気が画面いっぱいに溢れているのだ。だからこそ、その糧はすべての動物が分け合ってお腹を満たすことに役立てられる。

そして最後、卵の殻さえも、ぐりとぐらの工夫によって車になり、持ってきた道具を入れて、身も心もいっぱいになった二人を家まで運んでくれるのである。

この絵本はいったいどんな力を発揮しているのだろう。美学的な意味や科学的な意識からは遠く、ただひたすら子どもの心に焦点を合わせて描

かれている。いや、ことは逆かもしれない。芸術や科学や教育さえも意識せずに、作者が心の内に潜む〈子どもの感性〉をよみがえらせ、響かせながら「絵本を産み出す」とき、子どもの心を常に喜ばせる力をもち得るのだろうか。

#### ◆絵本という〈場〉の体験

もちろん絵や言葉や話の展開だけが絵本を作り出しているわけではない。『ぐりとぐら』の絵本が、野ネズミの背丈に合わせた天地の低い横長の版型であるからこそ、画面の端から端まで居並ぶ動物たちを描くこともできるのだ。『ピーターラビットの絵本』は、小動物が織り成すファンタジーをのぞき込むかのように、手のひらに乗る小ささでなくてはならないし、『三びきのやぎのらがらどん』は見開きいっばいに大ヤギがはみでるような大きさでなくてはならない。版型が統一



▲『ピーターラビットのおはなし』  
ビアトリクス・ボター作・絵  
いしいもこ訳、福音館書店  
(福音館書店からシリーズで刊行)

されている一般書と違って、絵本は実にさまざま  
な大きさと形をしている。

絵本は、描かれた絵を内包して、一つの空間  
(世界)を手渡してくれるものだからである。子  
どもがその世界に招き入れられることはもちろん  
だが、同時に、そこに共に入り込み、共に楽しん  
でくれる人がいることを忘れてはならないだろ  
う。絵本は、その空間が開かれるときからすでに  
保育者との共同作業によって、子どもと大人が共



有するところから始まるのだから。

作り手の心の中に居る〈子ども〉と、その欲するところを形にしようとする作り手、目の前の子どもに寄り添って共に「描かれた世界」を旅しようとする大人と、「描かれたもう一つの世界」に入り込んでいこうと目を輝かせている子ども、それらが作りなす〈場〉こそ、「絵本の世界」といい得るのではないだろうか。そこで得た体験が、将来の読書習慣につながることもあるかもしれない。



▲『三ひきのやぎのからがらどん』  
(ノルウェーの昔話)  
マーシャ・ブラウン絵  
せたていじ訳、福音館書店

しかし、それ以上に大切なことは、大人と子どもが絵本を媒介として生まれた〈場〉を、共に、たつぷりと味わう時間をもち得ること、描かれた世界の中に手を携えてすつぽりと入り込む幸福を体験することであるだろう。それこそが、めくろうとする絵本を支えてくれたように、子どもの〈生〉をひそかに、しつかりと、支えてくれるに違いないのだ。

(白百合女子大学 文学部 児童文化学科)

単著 『おもちゃ革命』岩波書店、一九九六年、

『娘たちの江戸』筑摩書房、一九九六年など。

共著 『文化の市場・交通する』東京大学出版会、

『ものと子どもの文化史』勁草書房、など。

#### 引用文献

細馬安通 「心体観測・共同作業としての読書」

『朝日新聞』二〇〇八年四月二十日 朝刊